



訪看新聞 11月号

発行元: グレース訪問看護ステーション横浜



日増しに秋が深まり、木々の葉も色づく季節になりました。

この時期、風邪や胃腸炎の流行が話題となりますが、実は冬にも発生しやすい、「皮膚真菌症」について、なかでも足にできる「水虫」についてお話したいと思います。

皮膚真菌症とは

真菌(カビ)が皮膚に感染、または寄生して起こる病気で、皮膚糸状菌(しじょうきん)(白癬菌(はくせんきん))、カンジダ、癬菌(でんぷうきん)、黒色真菌などによって起こります。なかでも白癬菌が足に感染したものが、いわゆる「水虫」です

足白癬(水虫)

足にできる浅在性白癬で、最も頻度の高い真菌症です。主に、足底に小水疱ができる小水疱型(汗疱型)、足の指の間のできる趾間(しかん)型、足底全体に角化のみられる角質増殖型に分類されます。

小水疱型

足底や足縁に小水疱や紅色丘疹ができるか、または皮がむけ、強いかゆみがあります。

趾間型

足の指の間の皮がむけ、白くふやけたようになります。親指から4番目の指と5番目の指の間によく発症します。

角質増殖型

足底全体の角質が厚くなり、皮がむけ、あかざれも生じます。

爪白癬(爪の水虫)

足白癬を放置していると、白癬菌が爪を侵し、爪白癬になります。最近の統計によると足白癬をもつ人の半分以上が爪白癬も持っていることがわかりました。高齢者に多くみられます。



いずれの場合も、必ず医師の診断を受けて処方された薬を使用することが重要です。自己判断の治療は悪化を招きやすく、さまざまな合併症を起こすこともありますので注意が必要です。

白癬菌は高温多湿の環境を好むため、冬には症状が落ち着き、一見治癒したように見えることがあります。しかし残った白癬菌はまた再び翌年の夏にも活発に活動し始めるのです。症状がなくても医師の指示期間はしっかり薬を塗る(もしくは飲む)ことが大切です。

【みずむしクイズ】「みずむし」という表現が使われ始めたのは江戸時代である。○か×か？

.....答えは○です！

「みずむし」として登場するのは江戸時代のこと。式亭三馬によって書かれた『浮世風呂』のなかに出てきます。当時は糠(ぬか)の油をとって、薬にしていたようです。田んぼ仕事をする季節になると足にポツポツとした水疱ができ、それがかゆく、水の中にいる虫が悪さをしたと思われて「みずむし」という名の由来になったといわれているそうです。

